

無名草子の和泉式部評言冒頭私注

鈴木弘道

○ 和泉式部、歌かずなどよみたることは、まことに女のかばかりなるありがたくぞはべるらむ。心ざまふるまひなどぞいと心にくからず、かばかりの歌どもよみ出づべしともおぼえはべらぬに、しかるべきさきの世のことこそあめれ。この世ひとつのこととはおぼえず。(拙著『校註 無名草子』 八二・八三頁)

「和泉式部」は、生没年未詳。中古歌仙三十六人伝・尊卑分脈などによると、父は大江雅致・藤原懷平・藤原資高の諸説があり、母は越中守平保衡の女というが、今日では、父は大江雅致が定説となっており、母についても特に異説がない。童名は「御許丸」(中古歌仙三十六人伝)。「雅致女式部」(拾遺集卷第二十哀傷)「江式部」(御堂閔白記寛仁二年正月廿一日条)の呼び名があるが、長徳二年(九九六)ごろ橘道貞との結婚後、「和泉」「和泉式部」と呼ばれるようになる。この間に生まれたのが小式部内侍である。やがて、長保二年(一〇〇〇)五月以後のころ、冷泉天皇第三皇子だんじょうのみやうめしたか彈正宮為尊親王と恋愛し、長保四年(一〇〇二)六月十三日に親王が薨去されるや、その弟そののみやあつみち帥宮敦道親王から求愛されたが、その経緯については和泉式部日記に詳しい。ところが、寛弘四年(一〇〇七)十月二日に再び親王の薨去にあい、寛弘六年(一〇〇九)四月、上東門院彰子のもとに出仕、翌寛弘七年(一〇一〇)ごろ藤原道長の家司藤原保昌と再婚する(以上の年月日は、『日本古典文学大辞典』の「和泉式部」の解説「吉田幸一氏担当」による)。情熱的の歌人として有名

であるが、その伝記は、多くの先学の研究にもかかわらず、まだ不明の点が少なくない。文中の「和泉」の「和」は、底本なし。岩波本により補う。

「歌かずなどよみたること」の「歌かず」は「歌数」で、全体の意は、和歌の数などが多く詠じてあること、で、「よみたる」の上に「多く」を補えばいかであろうか。和泉式部の詠歌数はきわめて多く、勅撰集入集歌として拾遺集以下二四八首、和泉式部集の正集（楠原本）に八九三首、続集に六四七首が収められているといわれ（『日本古典文学大辞典』の「和泉式部」1）、「和泉式部集」の解説「吉田幸一氏担当」による）、重出歌その他を整理すれば、彼女の詠歌数は約一五〇〇首となる。（吉田氏「和泉式部」『和歌文学講座6 王朝の歌人』所収）による。「女のかばかりなる」は、「ありがたくぞはべるらむ。」の主語文節で、「の」は同格を表す格助詞。女性でこれほどの人、の意。「かばかり」とは、詠歌数の多いことをさす。「ありがたくぞはべるらむ。」は、現在、めったにないことでございました、の意。ちなみに、吉田氏（前掲「和泉式部」）も、

それだけ多数の歌を伝えている歌人は、平安朝以前ではあまりなく、西行・貫之につぐものであり、女流では、比肩する者がいないほどの数である。（二五七頁）

と述べておられる。「心ざま」は、氣だて・性質、「ふるまひ」は、行動・動作、「心にくからず」は、奥ゆかしくない、の意で「心ざま……心にくからず、」は、和泉式部の人柄に対する批判の一部であり、鈴木一雄氏（『円地文子氏との共著「全講和泉式部日記」』）も、

彼女をめぐる男性としては、以上のほかに源雅通、源雅信、藤原道綱、源道濟、藤原兼房、源俊賢、藤原隆家、道命阿闍梨などの名が『家集』などから知られ、あるいは推定で、あるいは噂で取沙汰されているが、全身を傾けた恋愛といえるのはやはり彈正の宮為尊親王と帥の宮敦道親王の場合にかぎられるであろう。（三七頁）

と言われるように、彼女が主として自由奔放な恋愛を体験したことに対して、無名草子作者は、道徳的にあまり奥ゆかしくないと非難したものである。「などぞ」の「ぞ」の結びは、やはり「心にくからず」の連用形「ず」で係り捨てになっていると見るべきであろう。「かばかりの歌ども」は、これほど多くのいろいろな和歌、の意。「の」は、岩波本「なる」。「よみ出づべしともおぼえはべらぬに、」は、詠み出すことができるだろうとも思われませんが、の意。「べし」は、可能の意を表す助動詞。「とも」の「と」は格助詞、「も」は係助詞。しかしながら、「心ざま……心にくからず、」という連文節は、次の「かばかりの……おぼえはべらぬに、」という連文節に続かず、「心にくからず、」でいったん切れるものと考えるべきであろうか、それとも次の連文節に連用修飾文節として掛かるものと見るべきであろうか、一応、検討しておきたい。もし、仮に後者と考えた場合、「和泉式部は多くの男性を遍歴した、道徳的に奥ゆかしくない女性であるから（あるのに）これほど多数の歌を詠み出すことができようとも思われませんが、」の意となり、無名草子作者の女流歌人に対する基本的な考え方というのは、「男性遍歴など体験しない『いと心にく』い人柄の女性であってこそ多くの歌を詠むことが可能である。」ということになるであろう。これは、逆にいえば、「『いと心にくから』ぬ人柄の女性などに多くの歌が詠めるはずがない。」ということにはかならないが、歌論的立場からは何の根拠もないのではあるまいか。したがって、後者の考え方は成り立たず、当然、前者の考えに立つて解釈すべきであり、単純に「あまり奥ゆかしくなくて、」と解釈してさしつかえがないように思われる。したがって、むしろ「心にくからず」の読点は、句点に変更してもよさそうである。なお、右のごとく、和泉式部が「心ざまふるまひなどぞいと心にくからず、」と、その人柄に対して非難しているのは、他に有名なものとして、紫式部日記（日本古典文学大系本）の次の文章がある。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文

はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと。ものおぼえ、かたのことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの目にとまる詠み添へ侍り。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりゐたらむは、いでやさまで心は得じ。口にいと歌の詠まるるなめりとぞ見えたるすちに侍るかし。恥づかしげの歌よみやおぼえ侍らず。

(四九五頁。圈点筆者)

右の「けしからぬかたこそあれ、」につき、萩谷朴氏(『紫式部日記全注釈』下巻)は、

紫式部のような良妻賢母主義の人から見た、和泉式部の自由奔放な恋愛人生をさすのであろう。(中略)和泉式部の奔放な愛情生活が、若い男性の命を縮める魔性の女とでも思われて、紫式部のように道心堅固に装った偽善的な人間からは、十分非難されるに値するものがあつたのであろう。(中略)紫式部が道徳的に非難して、「けしからぬかたこそあれ」といったのは、必ずしも紫式部一個人の見解ではなく、当時の社会一般の和泉式部に対する見方がそうであつたからであると考えられる。(二二九・二三〇頁)

と述べておられるが、同感である。

「しかるべきさきの世のこと」は、当然そのようであるはずの前世の因縁、の意で、ここは天性をさす。「こそ」は強意の係助詞で推量の助動詞「めり」の已然形「めれ」と係り結びの関係となつてゐる。「この世」は、現世、の意で、「さきの世」に対して用いられ、無名草子には、さらに後世の意としての「すゑの世」「のちの世」の用例がある。「この世ひとつのこと」は、現世一つだけのこと、の意で、具体的には、努力とか習練など後天的・人為的な所業をさす。

〔通釈〕

和泉式部は、和歌の数などが「多ク」詠じてあることは、ほんとうに女性でこれほどの人は現在、めったにないこととでございましょう。「和泉式部ノ」気だてや行動などは「自由奔放ナ恋愛体験ヲ重ネタ点」あまり奥ゆかしくなくて、これほど「多ク」のいろいろな和歌を詠み出すことができるだろうとも思われませんが、「コレハ」当然そのようであるはずの前世の因縁「スナワチ天性」であるようだ。現世一つ「ダケ」のこと「スナワチ努力トカ習練ナドニヨル」とは思われない。